

Title	乳房の文化史 : 神々の乳房 : インドヒンドゥーの女神に見る
Author(s)	太田, 妙子
Citation	大阪外国語大学論集. 20 p.189-p.214
Issue Date	1999-03-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79791
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

乳房の文化史

(神々の乳房：インドヒンドゥーの女神に見る)

太 田 妙 子

Cultural history of the breast
Depiction of the breasts of Hindu goddesses in Indian art

Taeko OHTA

We can think of image of the woman's breast from a variety of viewpoints including artistic, religious, moral, medical and even political and economic. This article reports the results of observations made on the sculptures (from 3rd century BC to 12th centuryAD) of Indian Hindu goddesses, particularly on the expression of the breasts.

First ,one trend found in many ancient Indian statues of goddesses is for the upper body to be bare(naked). Secondly, during the thousand and several hundred-year period examined, a colorful variety in the way breasts are depicted exists, including plump, erotic,deformed,and shriveled. Such a wide variety exists that it can be thought of as a “ general breast catalogue” .

Third ,the Indian mother goddesses “Kālī”and “Cāmuṇḍā” which appear as goddesses of death,may have a common origin with the Japanese “Yamanba”. It is thought that the Japanese word “yama”and the Sanskrit word “yamma” may have originated from the same word,during a time before the Japanese adopted the kanji writing system. The two words are not only similar in pronunciation, they are also both associated with the location of a dead body.

<keywords> breast Hindu goddesses Cāmuṇḍā Yamanba yamma

<はじめに>

ヴェトナム、今は静かなダナンの町を1994年春訪れた。ヴェトナム戦争の時かつて米軍が上陸してきたその海岸も本来の静けさと平和を取り戻している。その町の一角に「チャム彫刻博物館」があり中世に栄え滅亡したチャンパ王国（Champa：ベトナム中部海岸平野にかけてチャム人が建てた国、紀元2－15世紀にかけて栄え17世紀末に滅亡した王国）の彫刻芸術が吹きさらしに近い形で常設展示されていた。ヒンドゥー教の影響下の砂岩の彫刻が多い。その中で目を引く作品がある。台座の上に麗々しくそそり立つリングalinga（男根）、シヴァ神信仰ではよく見られるものである。それを支える台座の縁取りが珍しい物であった。普通日本の仏像の台座を縁取る模様は蓮弁文様であったりするのだがなんと乳房の行列（mammary palade）であった。linga崇拜のような土俗信仰は日本にも西洋のケルトなどにも世界中普遍的にあるようだ。（文（25）p31）しかし台座を飾るmammary paladeの装飾には当時生々しさに驚き圧倒された覚えがある。（図1）インドに行くとシヴァ寺院などでlingaはしばしば目にする。yon（女性の子宮）を象った台座の上にリングを置き、子宮口が必ず北に向かって開口している。道に迷い方角を見失った人はシヴァ寺院を探しこの像を見つけ、子宮口の方角を北として方向を取り戻すことができるという。チャンパのlinga像はいささかヴァリエーションではあるが開放土俗的なヒンドゥー文化を表して充分である。最近日本国内でカンボジアのアンコール・ワットの彫刻が世界の美術館から集められ展覧会が開催された。そこではシヴァもヴィシュヌもインドにあるそれぞれの神より静かである。バンテアイ・スレイ（Banteay Sreyの女神（文（24）p 19 967年？）

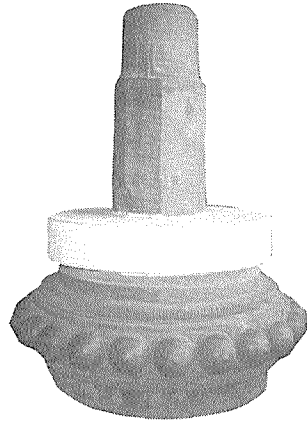


図1 台座 乳房の行列
linga像台座の縁取り文様が乳房の行列である。
（ヴェトナム・ダナンのチャム彫刻博物館）



図2 デーヴァター（女神 967？ 砂岩）
バンテアイ・スレイ（女の砦Banteay Srey）
カンボジア アンコール・トム北東30Km
に位置する寺院の女神。その微笑は「東洋のモナリザ」と称される。 文（24）

（図2）やドゥルガー女神(Durgā)（文(24) p 66プレ・アンコール期）（図3）のように豊満な像もあるが女尊（文(24) p 150）（図4）に代表されるようにアンコールワットの女神はまだまだしも東洋的というべきか慎ましく動きは少ない。そうしてみるとインドの女神達の元来のはち切れるような躍動感とはヒンドゥー教がやがて伝搬してゆく途上でアジア諸国のそれぞれの国情によって少しずつ姿も変わっていったものと考えられる。インドの古くインダス文明の頃は粘土の塑像が多かった。アレキサンドロス大王（Alexandros）が東方遠征でBC327年北西インドに侵入しその際連れてきた石工や建築家がインドへ石彫の技術を伝えたといわれている。

（文（23）杉山二郎）以後インドでは独特の豊かで官能的な彫刻が発達した。ここではインドの女神彫刻、なかでもとりわけ女性の「乳房」の表現を通して紀元前後から中世12世紀頃までを眺め、大地豊穡の象徴から祈りや畏怖心など人々が託した感情の歴史の一端を見たいと考えた。

1. ヒンドゥーの女神達

（1）インドの神々

インドでは古くからの土着の宗教、アーリア人以後の古代ヴェーダの聖典に基づくバラモン教、そこから派生したジャイナ教、仏教等があった。インダス文明の粘土印に見られるような古い土着の神々、アーリア人（Āryan）のバラモン教の神々、それらは本質的には「多神教」である。ルドラ（Rudra）やインドラ(Indra)を神と讃えるヴェーダの宗教はジャイナ教（Jaina）や仏教を派生しつつヒンドゥー教となっていった。ヒンドゥー教はやがて一時期隆

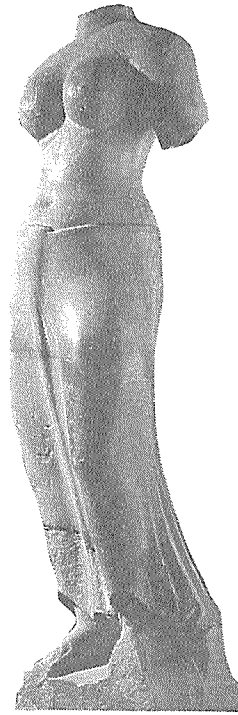


図3 ドゥルガー（7世紀前半 砂岩）
シヴァの神妃で闘いの女神
（ブノンペン国立美術館）文（24）

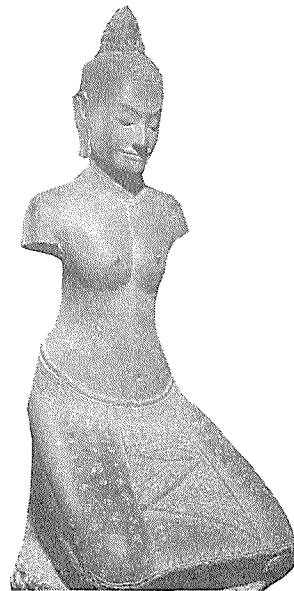


図4 女尊座像（12末～13世紀始 砂岩）
頭部が化仏を表していることから仏教の女尊として造られたと考えられている。12世紀若くして亡くなった王妃という説もある。
（ギメ国立東洋美術館）文（24）

盛をきわめた仏教を転換、吸収していった。近年でもヒンドゥー教とイスラム教を併せたシク教など多くの宗教がある。インドの人々の神の概念や吸収同化能力は一面で卓越しているといえる。その融合統一も変幻自在、文化の混淆そのものという一面を併せもつ。ヒンドゥー教のインド神話では「乳海攪拌」『注』(1)をこの世のはじめとする。神々と悪魔アスラが協力して「乳海」を「攪拌」しそこから不死の甘露・霊液(アムリタ)を得たとする。偶像崇拝を禁止しないインド・ヒンドゥーの神々の像は数多く残っている。しかし中世以降では「イスラム教徒トゥルク人(トルコ人イスラム教徒は初期の頃ヒンドゥー教徒によってトゥルク人と呼ばれていた)による偶像破壊」(文(19) p264)は行われたようである。ヒンドゥー・イスラムの宗教対立の結果多くの神像の抹殺や破壊があったと考えられる。それにしてもヒンドゥーパンテオンの神々達はしばしば変身し配偶の女神を引き連れ太古の土着の宗教から当時新興であった仏教までもやがて変化・吸収させあたかもインド多神教のような様相をなしている。先に述べたヒンドゥー教に特徴的かとすら見えるlinga崇拝も実は本来ヴェーダの信仰とは対立する土着の風習であった。

「生殖器崇拝の起源はきわめて古く、インダス文明の遺跡からもlingaらしいものが発見されていますが、アーリア人の宗教世界には存在しなかったことは、ヴェーダが男根崇拝を汚らしい土着信仰として排斥していることから明らかです。」(文(12) p46)「『リグ・ヴェーダ(Rg-Veda)』によるとシシュナすなわち男根を神と崇める者たちがヴェーダ時代のアーリア人達の敵とされ聖なる儀式の邪魔をする人々だとされている」(文(19) p336) このようにヴェーダの時代にはアーリア人の文明と対立的であった土着の宗教や習俗をやがてヒンドゥー教に吸収していったものと考えられる。そして後に結局ヒンドゥー教シヴァ神への信仰と結びつくことでlinga崇拝も大発展した訳である。多くの事象や神が「シヴァ神(Siva)」あるいは「ヴィシュヌ神(Viṣṇu)」など各々一つの神に収束してゆくのをみると本質的には「一神教」である。シヴァ神とヴィシュヌ神を半身ずつ合一させた「ハリハラ(Harihara)」(ハリ=ヴィシュヌ神、ハラ=シヴァ神)に見られるように一神教が争わずして吸収・合併してゆく。ヒンドゥー教も常に宗教改革を孕んだ歴史でもあり固定された確固たるものではなかったといえよう。古代インドの女神では豊満な肢体、躍動感が際立った肉感的な彫刻が多く見られる。「ヤクシー(Yakṣī)」を始めとする豊かな河川の神々や地母神などの他に後にヒンドゥー教に吸収された地母神の「カーリー(Kālī)」「チャムンダー(Cāmuṇḍā)」など鬼気迫る女神もいる。まるで裸で踊っているかのような躍動する彫像は石工達が「神を刻む」信仰心だけでなく「女性の美に憧れ讃え懼れた」当時の職人の美意識の成果であろう。

インドの古代彫刻の官能性・躍動性は世界にも類ないと思えるほど「具象性」をもつ。しかし身体部分の計測的比率や姿勢格好のあり方はよく見ると決して「写實的」ではない。体勢にも無理もある。西洋の古代ギリシア彫刻などに比べて明らかに人体としての現実味に乏しい。しかし残された豊富な彫刻の遺物はなんといっても魅力的である。柔らかな赤い砂岩でできた古代の女神像は生体の柔らかさや脆さ暖かさをも表現しているようである。ヒンドゥーの女神像、その中

でもここでは「女神達の乳房」の表現を中心に
かつて古代から12.3世紀迄に見られる変容と多
様性の中に時代の祈願の一端でも見てみたいと
本文を企てた。

インド女神像そのものへの関心を持つ理由の
一つは現代インド都市の女性の服装がかなり閉
鎖的なこともある。中世の長いイスラム支配の
影響もあってか建前として女性が肌をあまり露
出ししない。しかしこうした風俗もインドの近代
化が進めば遠からず変わってゆくと思感する。
ともかくも古代美術に見る女性の姿と現代の街
行く女性との間には違いがあり大いなる落差を
感じるからでもある。

(2) 男女両性具有神 「アルダナーリーシュ
ヴァアラ (Ardhanārīśvara)」 日常日本の仏
像では「観音」や「菩薩」は男だったのか女だっ
たのかあえて意識しないことも多い。我国のこ
とさら優しい中性的面差しをした多くの仏像は
「衣」を纏っていて「性」を超越した存在であ
るかのようだ。仏足跡や法輪で象徴的に仏法を
表わす「仏陀不表現」の地域を別にとするとイン
ドでも仏陀は通肩 (両肩を覆う着法)、偏袒右
肩 (右肩を脱ぐ着法) など衣を纏っている。イン
ドの民間信仰から出たヤクシャ (Yakṣa) 像
は上半身裸で「中インドにおける仏・菩薩像の
モデルとなった」 (文(16) p26) といわれて
いる。

「菩薩」とはボーデイサットヴァ Bodhisattva
の音略である。古代インドの上層階級の盛装で
上半身裸形で過剰なまでの装飾品に彩られ、頸
飾り、胸飾り、腕飾り、頭飾り、腕釦など豪華
な飾りを身に纏う。(図5) 裸にして官能的・
装飾的であり仏像というよりもヒンドゥーの神々

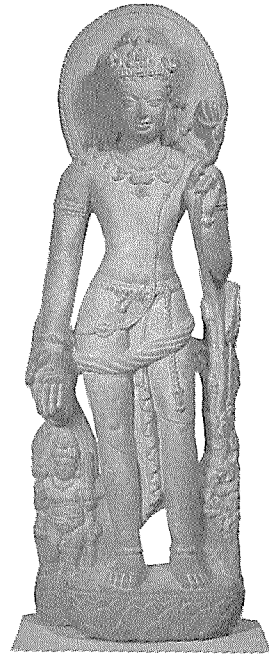


図5 観音菩薩立像 (9世紀)
蓮華座に立ち宝冠をいただき、首輪、
腕釦、耳飾りなどつけた青年の像。
(ニューデリー国立博物館) 文 (23)



図6 男女両性具有神 (7世紀)
アルダナーリーシュバアラ

右はシヴァ神、左はその妻パールヴァティーを示す
(マハーバリプララムの寺院の壁面像) 文 (19)

に近い。

インド美術にあってもヴィシュヌ神などは優しい中性的な顔立ちであることが多い。しかしインドの神々の姿は文字どおり赤裸々である。神々の個性や特技は彫像や絵画にある表現や持物で表現される。

こうした由来や個性のあきらかな神々の中に奇妙な神像が存在する。この世のものとは思えない「アルダナーリーシュヴァアラ（Ardhanārīśvara）」（図6 7世紀）（図7 8世紀）の像である。男女の「性モザイク」像といえようか。男女合体の概念は古代から洋の東西を問わず存在する。おそらくは奇形をもって生をうけた「半陰陽」「ふたなり」といった人々を見知ることによって現実にはあり得ない「性」が創造されたのであろう。観念の産物といえる。

古くギリシアはアテネ、プラトンの『饗宴』に見られる「球形の原人」の話『注』（2）。ギリシア神話のヘルメス（Hermes）とアフロディティ（Aphrodite）の間にできた「ヘルマフロディティ（Hermaphrodite）」は上半身女性、下半身男性で両乳房と男根をもつ合体像となっている。インドでは二つの神の個性を統合させたい時、二つの個性を矢状面(sagittals plane)に左右分割する。シヴァ神とヴィシュヌ神を左右半身ずつ併せて「ハリハラ（Harihara）」という一体の神となした。男女の統合も同じ手法である。シヴァ神とその妻パールヴァティー(Pārvatī)がそれぞれ右半身シヴァ神、左半身女神でこの「アルダナーリーシュヴァアラ（Ardhanārīśvara）」（文5 p105）（図6 7世紀）の一体となっている。当時の人々に推測される宗教的な意味を求めるとすれば時期的には7.8世紀の像に見られることからシャクティズム（性力信仰）と関連していると思われる。左胸は豊かな乳房があり女性を表現し、右は平板な胸で男性を表現してい



図7 男女両性具有神 （8世紀）
アルダナーリーシュヴァアラ

図6 同様の男女両性神
（エレファンタ島石窟） 文（5）



図8 乳子を持つヤクシー像（前3世紀黄褐色砂岩）
インドの伝統的女性美を伝える代表的傑作
（パトナ博物館） 文（23）

る。昆虫のカブトムシやクワガタでは左右で雌雄異なる一体が時々報告 観察されているが人間ではかつて無い。健康な身体を持った人からこれを見ると定方氏がいうように「グロテスク」に映るかもしれない。(文(5)p104)「性」のアイデンティティーをいう時、男とも女とも、又聖とも俗とも卑ともされる芸能集団、インド第3の性「ヒジュラ(Hijra)」達の崇める神でもある。

(3) 女神像の姿

①古代高貴の女性はトップレス?

インドの古代神像は男女共上半身裸体であることが多い。かつてはインドは暑い国だからと疑問を感じなかったが北インドの冬の寒さを経験するとこれは全く常態ではないことがわかる。普通彫刻や絵画はその時代の社会の風俗の一面、あるいは一端を表すと考えるのが自然であろう。この差は何なのだろうか?

北インドの内陸部の冬は一昼夜戸外で寝ていると凍死するほどの寒さで又逆に夏は40~50℃の高温に上昇するという。冬の裸はまずあり得ない。夏は裸に近かったかもしれない。が、暑いとかえてじりじりした日射しやマラリア蚊を避けるあるいは皮膚からの水分の蒸散を防ぐため布をまとうことも考えられる。乾燥地帯の中近東の女性がすっぽりと衣服に身を包むのは合目的でもある。一方世界には裸で暮らす部族、裸族がいる。アマゾン支流のスィア族の様に腰紐一本、ネックレス一本の盛装という部族もいる。(文(4) p12) インドでもバラモン(brahmana)の正装はやはり上半身裸である。Bashamのいうように古代インドの民衆が殆ど裸で暮らしていたのであろうか?

(文(2) p 210-3)



図9 ヤクシー像 (1,2世紀 赤砂岩)
樹神シャーバーンジカー像。小人を踏みつけアショカの樹を手握る。若々しい豊穡の女神像(マトナ博物館) 文(23)

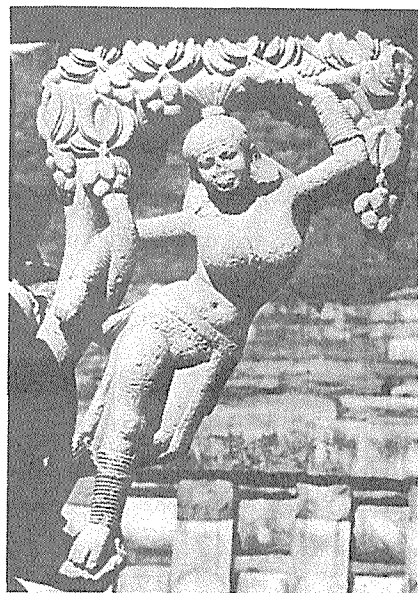


図10 ヤクシー (1世紀)
東門の柱と横梁の持送りに施された彫刻。マンゴー樹の幹に右手をからめ左手で枝を握り全身を大胆にくねらせている。
(サーンチー第1塔東門) 文(17)

勿論部族・地域によって一般的にそうであった可能性はあるが本当にそうだろうか？ 紀元前後ヒンドゥー教以前の女神やyakṣī (Yakṣī) 像 (図8) (図9) (図10) 『注』(3) は2000年の時空を感じさせない。その姿はみずみずしく触れると今にも踊り出すかとすら見える。紀元前後からインド彫刻の黄金時代といわれる5～6世紀頃までの彫像は仏教芸術を含んでその芸術性で高く評価されている。また躍動、律動感において際立っている。女神の彫像は信仰の対象であり、又寺院の施主、寄進者の要望も容れて、実際に石を刻む石工の男達の美の憧憬の集成でもあったろう。ただその頃の彫像も裸に見えるが実は「薄布」をまとっているのだと肥塚隆氏からはお聞きしたことがある。ジャイナ教 (Jainism) では裸は尊いものとしているが仏教では (Buddhism) 一般的に衣を纏う。

ただ筆者が観察しえた少数のヒンドゥー女神の範囲ではデリーやバラナシ、ムンバイでの彫刻で紀元前後のものには腕・首・肩に衣服の襷など痕跡を認めないものが多かった。もっとも7世紀頃になると大半はデリー国立博物館にある「乙女の胸像」 (図11) の左肩口に見られるように上腕、頸部、胸など何処かしらに衣服の痕跡が施されているものも多い。シースルー、透過性でも (diaphanous silk) 衣装を身に着けているという想定で表現している場合も多い。

カールリー石窟寺院の入口チャイティヤ (Caitya) 窟の前壁にある男女等身大「ミトナ像 (mithuna)」 (図12) はその時代の風俗の一端と考えられている。この男女一組のミトナ像が四組配されているのは日本の寺院の仁王像の位置と同じという。(文(5) p116) 守護のためと考えられまた裕福な寺院への寄進者の実像とも考えられるということである。(文 (19) p 117)



図11 婦人胸像 (Female Bust)
(7世紀 砂岩)

左肩から胸にかけて衣服の開口部を表す文様があり上半身裸ではないことがわかる。

(ニューデリー国立博物館)

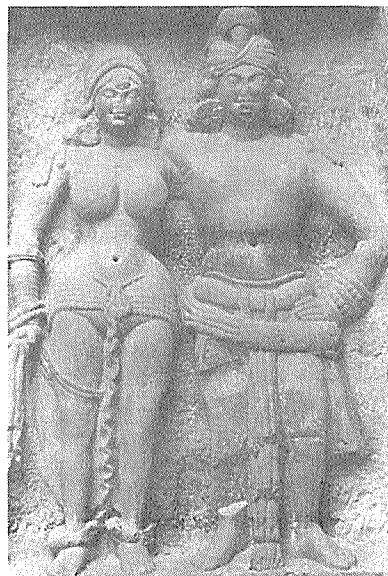


図12 男女像 (ミトナ像 1世紀)
チャイティヤ窟前壁にある等身大像。堂々とした体型で豪華な装飾を身につけ当時の上流階級の風俗を示すと考えられている。

(カールリー仏教窟院) 文 (19)

デリー国立博物館にある「ラクシュミー (Lakṣmī) 像」(図13 1世紀) はマトゥラーから出土したクシナーガ朝の作品である。豊穡の女神、「乳しぼりの女神像」である。授乳あるいは搾乳という珍しいポーズをとり素材は赤砂岩 red sandstone、柔らかそうで人肌の暖みさえ感じられる。珍しいポーズであるが当時の一種の定型であったのではないかと考える。何故なら同様のポーズの像がガンダーラ地方の倉庫にある未整理の仏像の中に混じっている映像を見たことがあるからである。ラクシュミーとはヴィシュヌ神の妻であり、日本では吉祥天、また毘沙門天の妻とされている。ヴィシュヌが10の姿に化身(魚・亀・猪・人獅子(ナラシンハ)・矮人・パラシューマ(斧を持つラーマ)・ラーマ・クリシュナ・仏陀・カルキ)するに伴って、ラクシュミーも変わる。ヴィシュヌがクリシュナとして生まれる時はルクミニー、ラーマとなって生まれる時はシーター (Sita) など様々に変身する。

「母と子供の像」(図14 2世紀) でも女性は紐状又はベルト状の下衣は着けているが上半身裸と見える。足下に子供を配した豊穡の女神像であり乳房も身体も豊かである。

「子供のクリシュナ(Kṛṣṇa)」(図15) は裸の女達がバターを造っている像でやはり5世紀の作品とされている。紀元初期女神彫像の上半身が裸であると推測される理由は観察の印象によるだけではない。例えば『カーマ・スートラ(Kāma-sūtra)』の注釈に、「カンチュキヤー——古代の王の後宮の侍女達に与えられた名前で、彼女たちがいつもカンチュキと呼ばれる布で乳房



図13 ラクシュミー像 (1世紀)
乳搾りの女神像。従って上は裸身と思われる。
(ニューデリー国立博物館)



図14 母と子の像 (2世紀)
足下に子供が座る。女性は腰に紐あるいはバンド状の布を纏っているが上半身は裸と考えられる。
(ニューデリー国立博物館)

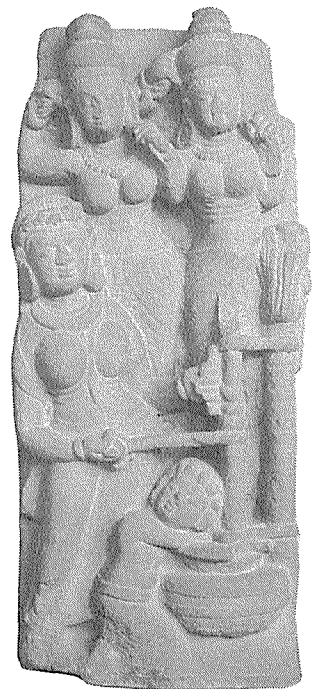


図15 子供クリシュナ (5世紀)
女達がバターを作っているところへ寄っている子供のクリシュナ
(ニューデリー国立博物館)

を覆っていたことに由来する。古代の王妃は乳房を露出させる反面、侍女たちは布で乳房を覆いかくすならわしだった。」(文(14) P128-129) とある。colaka あるいは kancuka というような上着、胴着(bodices)を着けていたと考えられる。(文(2) P210)

同じ時代の作品でデリー博物館にある河の女神「ガンガー女神(Gaṅgā)」(図16)「ヤムナー女神(Yamunā)」(図17)も5世紀、インド彫刻黄金時代 Golden ageの作品とされている。この両像はサリー様の衣を纏っている。それはドレープを横に使って、殆ど着衣の状態の様にも見えるが乳房の乳首に近い部分をあえて露出しその上下を布で覆い押さえている。現代的着衣の発想とは逆である。ガンガー女神では露出した乳房の下部を細い紐で結んで支えている。しかし女神ガンガーもヤムナーもその侍女たちは、最も敏感な乳首の辺を細幅の紐で覆っている。この像からも推察されるのはおそらく身分の高い女性を表現する時、乳房も乳首も露出していたのではないかということである。

衣服を纏うと実際のところ男女差はわかりにくい。古代ギリシアでは男女殆ど同一の衣服を着ており外見では男女は分かりにくい。「—貧しい詩人の場合、夫と妻で一枚のチュニックしか持っていなかったので交互に着て外出していた。」(文(7) P30)とされ密着型ではないフワッとしたドレープでは外見からは性差がわかりにくかったと思われる。その後男女の服装は少しずつ解離してゆくが近代、決定的となったのは「フランスのルイ14世時代に仕立業界が分裂し女性のドレメギルドの勅許」を与えたことによる。(文(3) p93)以後パリを中心に女性ファッションが独自に隆盛を極めてゆくことになる。現代では女性も男性のズボンスーツへの志向がみられ不思議も違和感も無い。しかし「近代になっても、

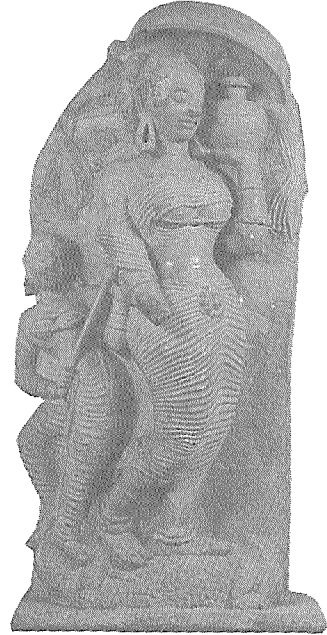


図16 ガンガー女神 (5世紀)
インド第1の聖なる河ガンジスの女神
ガンガーと侍女は布で乳房を包むよう
に押さえ紐で固定しているが中央に近
い部分がむしろ露出されている。
(ニューデリー国立博物館)



図17 ヤムナー女神 (5世紀)
ジャムナー河の女神 ガンガーに似
た胸元である。
(ニューデリー国立博物館)

実は19世紀前半頃、女性のパンタロン着用は、貴族かブルジョア階級のみに限られていた」(文(7)p25)のである。フランスで19世紀パンタロンは貴族階級の女性しか着用を許されなかったといわれる。偶然か当然か男装の麗人といわれたジョルジュ・サンドや川島芳子は本来、貴族階級に属していた。ただ川島芳子の場合は、現実的には戦時の護身用の男装であったと筆者は解している。これはまたアメリカ南北戦争の時、男装した軍医補、ドクターメアリー・ウォーカーを思い起こさせる。(彼女は女性の為に強姦防止服をデザインした初期の女権拡張論者)(文(1)p569)「ズボン」「もんぺ」などは戦時下の護身や活動性が最大の便宜であった筈である。西洋の「鎧」から変遷を経た現在の男性スーツは Anne.Hollander が『性とスーツ』(文(3))で主張するまでもなく機能的には必要にして十分な形といえよう。Anne.Hollanderはこの一見変哲もないスーツ、日本では「どぶねずみのような」と酷評されたりもする男性スーツこそ完璧な形態と機能を備えているのだと主張している。若い世代ではジーンズを含めてズボン一般が女性にとっても服装の一つの定番になりつつある。「服装の自由」を謳歌しスーツもジーンズも男女共々愛用している。従って今現代再び、古代同様服装・外見からだけでは男女が判別し難い時代となったともいえる。。服装は「性」の先入観を産む。その格好から人は間違って服装外見上の「性」に恋する者が現れないとも限らない。芥川龍之介『奉教人の死』の「ろおれんぞ」やシェークスピア『十二夜』の「ヴァイオラ」(男装して「シザリオ」)の身に降りかかる悲喜劇の成り立つ訳である。

昔は身分で衣服は制限された。また宗教ではことに男女のすみわけは課題であった。世界の偉大とされる宗教はその教団が完成し多くの信者を得ることになった時点において一種の現世の権力構造に変質してゆく。大きな教団組織を形成し現実社会の権力を持つことで「成り立ち」の当初とは変容して行くように思う。宗教は時として政治権力と拮抗した時として現世の権力に組み込まれて行く。そして殆どの場合政治的な社会の権力構造と同じように女性への劣視が固定化したと筆者は考えている。仏教においてユダヤ教、キリスト教、イスラム教、儒教において概ねそうと感じる。宗教の発端となった聖者がどう考えていたかはわからない。いずれにしても彼等は自分の著作は残していない。宗教の教義とは聖者(あるいは神)が弟子達に折りにふれ語った「言葉」を直弟子や後世の信奉者が追加・修正・改良(悪)・拡大したものであるように思う。そして長い時間の波に曝されながらそれぞれの時代に適合するように民衆の倫理道德志向を探りつつ集大成していったもの、絶え間なく変わってゆく宗教改革の歴史が宗教の歴史ではないかと感じている。そうした大きな潮流の中では女性への顧慮はあまり多くはなかった。キリスト教社会でも枝葉に属するが「フリーメーソン(freemason)」という組織があったといわれる。キリスト教に潜む不合理性や非科学性を批判し理想社会を目標とした秘密結社「フリーメーソン」という組織があったという。しかしここではキリスト教そのものよりもさらに女性への偏見が強いようである。その仲間に入団すること、ロッジの一員になる為の儀式では上半身つまり「左胸」を露わにして「乳房がないこと」「女性ではない」と証明することが要求された。つまりこのよう

に上半身裸にすることは最も容易な男女識別法であるともいえる。古い時代に遡って世界の女神達を見てみると大らかさ、その大胆なトップレスは決して姑息的なものではない。そして古代インドに限らず女神の胸はむき出しのことも多い。ラスシャムラの女神（BC19～18C）（文(7) P25）（図18）でも胸は露出している。クレタ島の蛇女神（図19）でもそうである。蛇女神については「多産幸福を願う信仰によるものと解されている。」（文(4) p224）という解釈が一般的である。しかし一方において「コルセットはアンダーバストを支える、乳房は誇らしげに顕示され露わである」その姿を「美術史家エリー・フォールが享楽的な”人形”」と言い、「クレタの女性は酔いどれ、海賊たちがオリエントの怪しげな場所のあちこちで起こしたハプニングの産物」（文(7) P27）などと非難して西洋文明として受け入れがたいと拒絶反応を示す美術家もいる。

率直に見ると古代の女神たち、王女や王妃など社会的身分の高い女性程少なくとも正装では上半身裸のトップレスであったように思える。これは何故なのか？現代的な意味での胸に対する羞恥心はなかったのであろうことも推測される。また分けても彼女達にとっては「明らかに女」であることを誇示する必要があったのではないか。大地豊穡の女神、祈願の対象それに連なる王妃達は紛れも無く「女」であることを顕示し象徴としての「乳房」を衆目に曝す必要性があったのではではないかと考える。



図18 ラスシャムラの女神（前19～18世紀）
儀礼用の正装と考えられるが胸は露わである。
文(7)

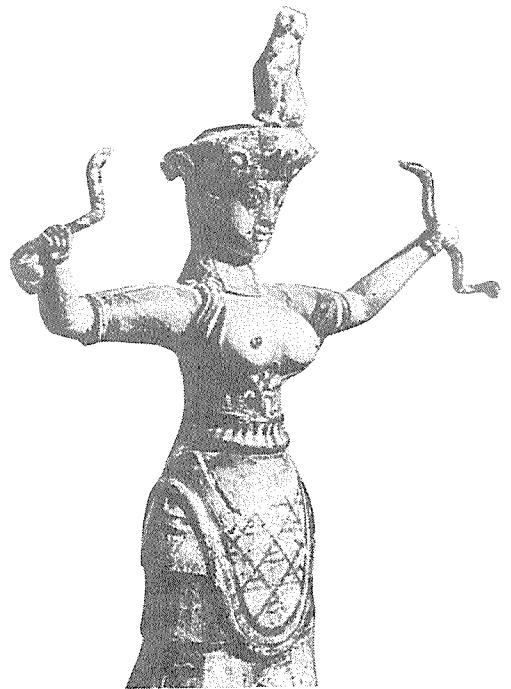


図19 蛇女神（ミケーネ後期 前15世紀）
テラコッタ クレタ島 文(4) (7)

②インド彫刻に見るブラジャーの出現

前述の様に5世紀河の女神「ガンガー女神 (Gaṅgā)」(図16)「ヤムナー女神 (Yamna)」(図17)では乳房を周りから包むように覆っている。脇の小さな侍女には胸に細い紐が見られる。7世紀ライオンにのるドゥルガー女神 (Durgā) の戦いの像(図20)も胸は幅のあるバンドが覆っているように見える。豊かな胸は闘いにとって活動性を削ぎ邪魔であろう。短槍を持った Kaumari 像 (7世紀 赤色砂岩)(図21)、Vaishnarī (図22 8世紀)、Brahmanī (図23 12世紀)などに時代が下がってくるとブラジャー様の胸当てをした彫刻がしばしば見られる。当時8世紀イスラムが西北インドに侵入し11世紀にはインド中央部に侵入、1206年には奴隷王朝が成立しイスラム教の風俗もヒンドゥーと摩擦しながら徐々に融合していった面もあったであろう。南インドでは上記のような乳房をバンド状に覆い両肩から紐で吊り下げた胸当ての様な上着をつけている彫像がしばしば現れる。身体の動きにつれて乳房が揺れるのは煩わしく活動的ではない。人々が胸を保護し固定しようとするのは合理的でもあり、当時の服装のそのままの反映と考える。

類似の胸当てはヨーロッパの歴史上にも見られる。「古代ギリシアでは「アポデスム」、布の小さな帯が乳房をカムフラージュするために用いられ、やがて「アナマスカリステル」とか「マストデトン」と呼ばれる赤い細いリボンとなりローマでは「タエニア」、少女達の間では「ファシア」という幅広いバンド、更には乳房を圧迫して発達を抑える「マミルラーレ」も出現した。一般的には「ストロフィウム」というスカーフの一種で乳房を圧迫しないで包み支えるもの」であり「ユダヤ女性が着用した「エフォット」というつり紐で支えるコルセット」などがあった。(文(7) p35-6)



図20 ドゥルガー (7世紀)

ドゥルガーはシヴァの神妃である。ライオンに乗り弓矢と剣を持って悪魔を破る闘いの場面。

胸はバンド状に覆われている様にみえる。

(マハーバリプラム) 文 (19)

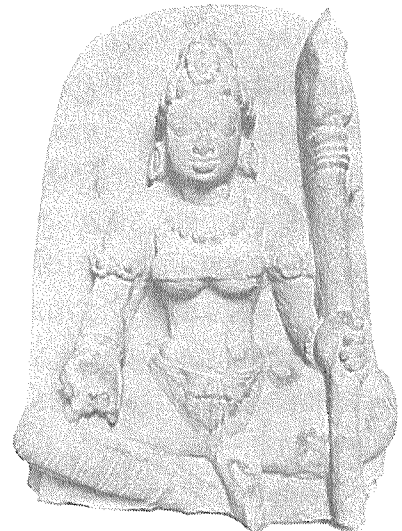


図21 カウマリー (Kaumari 7世紀 赤砂岩)

母神の中の一人で左手に短槍を持つ。

胸は幅細のバンドで取り巻いている。

(ボンベイ博物館) 文 (20)

ヨーロッパの実生活でもそうであったがこのようにインドでは彫像において次第にブラジャー様の胸当てが見られるようになる。実生活を投影した表現であろうが同時に女性の羞恥も包み込む様になっていった。

今日のブラジャーの機能を満たす「近代ブラジャー」は実はごく最近完成されたものである。

「モダンブラジャーは1930年に完全な形となり、身体と共に動くようにデザインされ乳房を圧迫することのない滑らかなポケットで保護し固定した」(文(3) p 206) という。今世紀の産物なのである。

(4) 性の饗宴——狂態の彫像群

インド彫刻乱舞の裸体像。扇情的、挑発的とも見えるこれらの彫刻を前に人々はどう反応したのであるのか？

デリー博物館を入ったすぐのロビーに置かれていた女神像(図24)はヤクシー(Yakṣī)と思われるが豊かな乳房と外陰部だけが黒ずんで汚れている。

砂岩 buff-sandstone でできた Flying gandharvas (図25 6世紀) もそうである。豊満な裸身の女神像にもそのまま鑑賞されたと見えるものと多くの人による手垢で外陰部と乳房がとりわけ黒ずんでいるものがある。明らかに「人の手」が繰り返し触っている。美術館内でも手の触れる位置に無造作に置かれてあるためつい手で触って通る怪しからぬ男が後を断たないのかと最初は思った。これはしかしどうもたまたま男達が触って通ったのではないらしい。いくつかの美術館で多くの女神像を見ると女性の特徴的身体表現(乳房・外陰部)が黒く汚れたものとそうでないものがあることがわかる。女性部分(乳房・外陰部)が汚れている像は明らかに、本来触られるべき場所、例えば寺院の入口などその守護神、魔除けなどの意味も兼ねて置かれていたようである。出入



図22 Vaishnarī (8世紀)
胸あては肩から紐で吊り下げられている。
(ニューデリー国立博物館)



図23 Brahmanī (バラモンの女性 12世紀)
幅の細い胸あては肩から吊り下げられている。
(ニューデリー国立博物館)

りの参拝者は水や油や牛乳で濡らした手で供物（プージャー：pūjā）を捧げ触って通っていたのか。現代、シヴァ寺院にある「リング」に参拝者が同様に水を掛けたり花を供えたりして祈っているのと同じようなものと解釈される。カジュラホ（Khajurāho）の寺院（10中～11中世紀）にはインド彫像の中でもとりわけ異様にして多彩アクロバットのような彫刻群がある。男女の交歓、あるいは交接の群像を多く含む。現代の眼から見ると宗教の名のもとにカジュラホ寺院群を飾る膨大なポルノ群像を造る事業など多数の石工が長い年月の間かかり、創作・寄進の意義が果たして納得できていたのだろうか疑問に思える。何故こんなものが造られたのか？ 幾つかの説がある。ヒンドゥー教に男女の合一を一つの理想的到達点とする考えがある。シャクティ（Śakti:性力）信仰も製作の原動力かもしれない。仏教が隆盛の後衰微してヒンドゥー教に吸収されてゆく変身途上の密教が我国日本へ入った当初の密教であった。ヒンドゥーの一派で性力信仰（シャクティズム）が盛んになると性的欲望を神の力の一部とする宗派が隆盛となった。男女の性的欲望を肯定し宗教的歓喜に至る一つの道、法と位置づけている。しかもシヴァ神は「ハシシ(hashish)」を好むという。『注』(4)

肉体賛歌、更には向精神作用のある hashish をも嗜むという危険とも一体となっている。シヴァ神は又別名バーンゲリ・ババ（大麻を好み酔いしれ忘我を楽しむ神）と呼ばれ、信奉者達迄もが今もこれを使ったりする。こうした文化風俗、医学的には許容しがたい習慣もヒンドゥー教には内包しているといえる。従って「いわゆる宗教」とはかなり異なったインドの社会風俗と考えられる。仏陀は乗り越えるべき最大の煩惱として「色欲」を位置づけた。しかしヴェーダの宗教から派生した仏教はインド国内ではやがてヒンドゥー教に吸収され衰微した。紀元600年ころか



図24 女神像（ストウーパ欄楯 2世紀）
樹下に踊る姿はヤクシーと考えられる。
乳房と陰部が黒く汚れている。
（ニューデリー国立博物館）

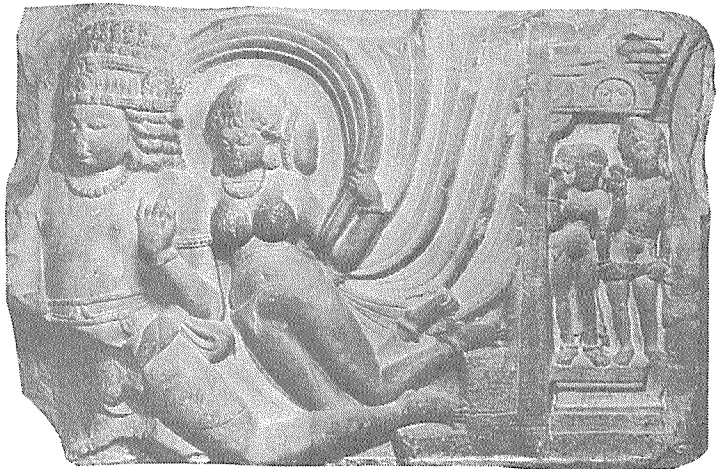


図25 飛天のカップル（6世紀）
女神の乳房、陰部は黒く汚れている。
（ニューデリー国立博物館）

ら興隆したタントラの宗教はシャクティ派の潮流となって行く。インド仏教末期のヒンドゥーと分かち難い状況下で仏教がチベットを通り「密教（左道）」としてはるばる日本へ伝わる事となる。中国やモンゴル・チベットなどの大陸とは異なりさすがに日本の密教では歓喜仏ははばかられ、そう露骨な仏像も日本では見られない。「愛染明王」などの名称にその残照を見るのみである。この様にインドのシャクティズムは我国へは伝わらず「日本へもたらされた仏教典の中で『理趣経』がこうした影響を受けている珍しいもの」といわれる。（文(12) p50） 仏教は日本人にとって大慈大悲の教えとして浸透していった。シャクティ派の不純な点を批判して13世紀頃起こってきたのが右道密教といわれる。（文(20) p432） しかしやがてBuddaの生まれた国では仏教は衰退し、仏陀はヴィシュヌ神の10化身の中の一つとされることとなった。ヴィシュヌ（Viṣṇu）は現代インドで最も広く信仰されている神である。しかもその化身の一つには現世的というか愛欲的「ラーダー・クリシュナ（Rādhā・Kṛṣṇa）」がある。それを題材にした絵や彫刻はインドの空港や土産物店でもよく売られている。男女のカップルがインド彫刻の中でも珍しく顔を向き合って抱擁している悩ましい姿態の彫刻や絵が店頭に飾られていて驚く。この時のクリシュナは少年牛飼いきりシュナ（Kṛṣṇa）であり愛人ラーダー（Rādhā）は「アナゴージャ」という牛飼いの夫のある人妻である。それにしてもこのようなヴィシュヌの一化身が仏陀になっているなどとはお釈迦様でも知らない事であろう。この場合もかなり異質と思えるものを同化しようとする貪欲なヒンドゥー教的発想とみえる。一方当然のことながらヒンドゥー教の歴史の中で「ラーダー・クリシュナ」信仰をヴィシュヌ神信仰の一つの墮落した形態だと弾劾する流れもある。『ヒンドゥー教』（文(20)）の中でクリシュナ、パンドルカル達は以下のように批判・非難している。＜ヴィシュヌ教の墮落＞としてラーダー崇拜の項で「女性の要素が偶像化され特別な崇拜の対象となると、このような嫌悪すべき腐敗がかならず起こる」とする。（文(20) p245-8）

オリッサ（Orissa）の彫刻なども同様で女性外性器がホールで示され、寺院へのお参り、通りがかりに参拝者達が指を入れたり触っていったようだという。Thomas Donaldson（文10）によると「古代ヒンドゥー寺院の女体・性交像や淫らな彫刻の役割は建物を雷や嵐やほかの自然的災害から守ること――聖典『アグニ・プラーナ』より」（文(5) P116）という思想もあるという。9～13世紀といえば既にイスラムが西北インドから中央インドに侵入してきている時代である。今に続くイスラム寺院とヒンドゥー寺院の自己主張と対立がすでにあったことは容易に想像される。同時に宗教の啓蒙や営業もあった筈だと思う。

宗教とはいっても「ヒンドゥー教」には歴史上幾多の宗教や国家が人間の弱さとして克服すべき欲望の対象とした「薬物・酒・性的悦楽」を宗教的歓喜の一部として組み込んでいるという側面がある。一般の日本人に受け入れられて大慈大悲の仏教からするといかがわしい邪宗に見えなくもない。それにしてもこの様なボルノ群像が精力的に作られたのは何故だろうか。ヒンドゥー・シャクティ派のひたすらな信仰心だけだろうか？ 単純に考えてイスラム教が席捲すべくインド

に侵入してきた時、それとは異なるヒンドゥー教寺院側が誰にでもアピールする「見世物」「人寄せのためのボルノ」としてこれらの珍無類な彫刻の一群を造ったのではないか？このような単純・率直な解釈が美術の専門家ではない筆者には理解しやすい。

（5）鬼女の系譜（カーリー、チャームンダーそして山姥）

ヒンドゥー教では、パールヴァティー(Pārvatī: シヴァの妻)やラクシュミー(Lakṣmī: ヴィシュヌの妻)、それに琵琶を持ったサラスワティー(Sarasvatī: プラフマーの神妃・娘)といった配偶女神、古代からの土着民間信仰、河水神、地母神とされるヤクシー(Yakṣī)、カーリー(Kālī)、チャームンダー(Cāmuṇḍā)などまで数多くの女神がいる。彫刻上紀元初期～5,6世紀の豊かで柔らかな表情は紀元1000年前後に下ると女神の表現から少なくなっていくようである。同じような裸体像であっても整ってはいるが肉迫する感動は呼び起こしにくい。一つには彫刻の素材が豊富になり青銅が使われだした。石材も砂岩や石灰岩の他に緑泥岩、玄武岩なども使われるようになった。又彫像技術は進んだのかもしれないが肖像学的ルールを踏襲することが専らとなり表現は硬く定型化してきているとも感じる。

古代のヤクシー(Yakṣī)像や(図9)太古の河水から出てきた地母神のガンガー女神(Gaṅgā)(図26)などに見られるのは窈窕たる女性美といえよう。

一方カーリー(Kālī)やチャームンダー(Cāmuṇḍā)という恐ろしい形相の血なまぐさい河神や地母神がいる。『注』(5) 本

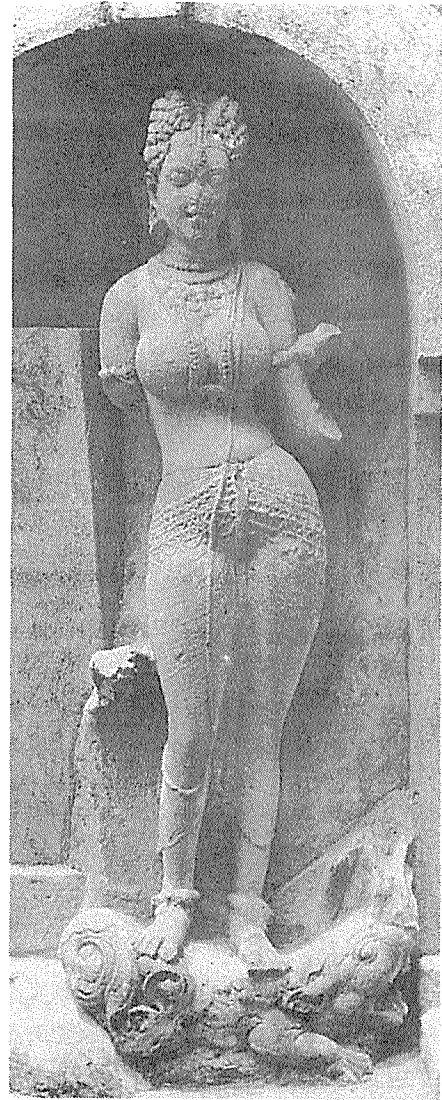


図26 ガンガー女神（5世紀）
ワニの上に立っている人等身大の女神像。
やや伏し目でほっそりとした豊満な美しい像である。（文（22））

来土着信仰の対象だったものがアーリア文化に吸収されてシヴァ神(Siva)の妻の一形態とも変じている。カーリー(Kālī) (kal:サンスクリット語起源「黒」という意味) 女神は土着であったドラヴィタの人々(Dravidian)を示すのか肌の色は黒い。髪はおどろに振り乱し手には人の生首や髑髏杯、肉切り包丁をふりかざしてネックレスは人の首を連ねたもの、そして腰巻きとしては多くの切断された手足を蓑のようにしてぐるりと取り巻いているのである。戦場や墓場を好み、シヴァ神を足下に踏みつけているという構図である。神といっても痩せこけた餓鬼か老婆のような姿で従ってその乳房は萎びたあかかないかという皮膚のたるみで表現されている。カーリー(Kālī)は近代まで生贄を要求する神であったのだが東インドの祭りとしてもそうした行事は宗主国イギリスが中止させたといわれる。おどろおどろしい「チャームンダー(Cāmuṇḍā)」の像(図27)もその系統に属する。チャームンダーはyamma(閻魔)の妻と見なされていたのが後の12世紀頃になるとシヴァ神の妻として吸収されていったようである。yamma(閻魔)と同じく屍林(死者を集め焼くところ、墓場)を支配する女神である。ニューデリーの国立博物館では、美術室をつなぐ回廊に二つの「チャームンダー(Cāmuṇḍā)」を見ることができる。その一つ、縦60cmほど、彫刻の表す内容は病気から暗黒の死の世界をも包含し複雑である。

図27では太い樹を背後上方に配し象の生皮をカーテンのように拵げその前に半跏で座っている。身体、顔面とも痩せこけ肋骨が数えられそうである。静脈は浮き上がって見え羸瘦(るいそう:やせ)激しい。右大腿にはlepra(癩病・ハンセン病)で蚕食された印といわれる癰痕がある。筆者には死体に普遍的な蛆虫にも見えまた何らかの皮膚病ともとれる「傷」が施されている。多くの本で「lepraの癰痕」とあ



図27 チャームンダー (12世紀)
人首を連ねたネックレスをし腹には蠍が喰いついている。
萎びた左乳房から乳汁が流れている。
(ニューデリー国立博物館)

るが筆者が実際に診たlepraの皮膚変化とはやや異なるように思える。癩をその様に象徴的に表現するのかどうか疑問が残るところではある。

痩せ衰えた腹部には蠍（さそり）が食いついている。その座の下にはうつ伏せになっ押し潰されんばかりの男は横たわっている。これは夫シヴァ神と考えられている。（文（8）P268）チャームンダー（Cāmunda）ではこの構図以外に立った女神がシヴァ神若しくは餓鬼を大地を踏みつけて踊っているかの如き姿も多数ある。（文（8）P273、321、277） 図27の女神の背後、樹々の枝には人の首が多数ぶら下がり、チャームンダーはここでもカーリーに似て人の首を連ねた首飾りをかけている。チャームンダーは本来、死地を支配するyamma（閻魔）のパートナーということであった。シヴァも墓場を支配する神であったとされるところから他のシヴァの妻達と同様、戦いのドゥルガー、カーリーと同じく吸収されていったようだ。腕は5対、10本あり、手首、足首に巻きつくプレスレット、アंकレットは小さなコブラ、蛇である。像の下段は支配する暗黒の死の世界であろうか。火葬のため集められ死体が安置されていた屍林である。女神の乗り物であるフクロウが配され、鳥獣に啄まれる死体、又切断された腕と首が杯に盛られて献げられている。この女神は額に第三の眼を持つ。これは本来シヴァ神のシンボルであるところから12世紀のこの時代には既にチャームンダーをシヴァの妻と見なして吸収していったと考えられている（文（8））。背後の樹、象の皮、痩せこけた女神、蠍の喰い付く腹部、足下のシヴァ、そして下段にある屍体の世界などがチャームンダーの定型的パターンであるようだ。

このように痩せこけた女神の乳房は当然ながら豊満ではない。カーリー（Kālī）と同じく萎んだへちまのような三角形の乳房がうっすらと垂れ下がっている。他のチャームンダー像の写真では認めがたいが 図27 では左乳首の先端から紐状の太い流れが表現されている。流れの発端部位からいって分泌乳汁の表現（文（8））と考えられている。

食いついた腹部の蠍が民衆の腹痛をとって代わって苦しんでくれるという。その萎んだ乳房からは乳汁が流れている。遊牧の民であるアーリア人のヴェーダ教典『リグ・ヴェーダ（Rg-veda）』（文（9））には「乳」やその恵みに関する記載は極めて多い。「シバの精髓はミルクである」という表現すらある。チャームンダーは自分の額に第3の眼を持つがこれはシヴァの「第三の眼」も自分のものとして取り入れ又「乳」も包含した多機能な女神となっている。屍林にいる死の女神が同時に生命の泉である乳をも具えるという一見矛盾に満ちた統合は「ヒンドゥー的」なのだろうか。太古の畏怖される自然とはそんなものだったのではないか。 翻って我が国でこの様な「神」があるだろうか？ 豊穡を感謝しつつ一面で人喰い鬼と懼れられる存在、神即自然——日本古来の「山姥（Yamanba）」もそうではないだろうか。日本の国土の70%以上を占める山地、自然そのものは山岳信仰の対象でもあった。どこの土地でも原始信仰とはそのようなものであったのではないか。インドの「yamma（ヤマ）」は死者を集めて焼く屍林を司る神、墓場の統治者である。シヴァ神も戦場、墓場を好む神であるが、これらをも包含してカーリーやチャームンダーは造られた。古代部族の熾烈な闘いと支配者・被支配者の相克をも含んで

いる言葉かもしれない。近代西洋の善悪を「神と悪魔」のように単純化した思想とはやや異なる。善悪不二、邪正一如の自然界、日本でいえば「山姥 (Yammba)」がインド「カーリー (Kālī)」や「チャムンダー (Cāmuṇḍā)」の女神に重なって見える。

2. 考察

インド彫刻千年余りの中で「女神の乳房」を中心にしてみた。各時代の彫刻家主に男性であったと考えられるがその祈りや憧れを聞き透かし観たいと試みた。ヒンドゥー女神の彫像に見られる乳房の表現も多様多彩であり形の具体的なものから象徴的なものまで様々である。図6の男女両性具有神「アルダナーリーシュヴァアラ (Ardhanārīśvara)」、図10の空に踊る「ヤクシー像 (Yakṣī)」や図27の「チャムンダー (Cāmuṇḍā)」など具象的に見えるが写実的かというとはそうではなく、むしろ象徴的である。古代ギリシア彫刻の解剖学的な比率、人体へのこだわりとは異なって写実というよりも強調したい部分を思い入れをもって誇張している。その為に表現も一様でなく変化に富んでいる。遊牧の民であったアーリア人 (Aryan) の『リグ・ヴェーダ (Rg-Veda)』や創世神話「乳海攪拌」に「乳」に関する表現は多い。

彫像における「乳房の表現」は多様多彩であるが、変わったものとして男女両性具有神「アルダナーリーシュヴァアラ (Ardhanārīśvara)」がみられる。それはまた現代的な「性そのものの多様性」をも示唆する。この奇妙な神像、男女の「性モザイク」は、上半身だけを見ると「単純乳房切除術」をうけた乳癌患者にも見える。又他にも現在医学は生まれつきの「性」が単純に男と女だけでなくその間に多くのヴァリエーションがあることを立証し始めた。近年科学的に問題が認知され始めた「性同一性障害」やインド第3の性「ヒジュラ (Hijra)」を連想させないでもない。昔からあるが「性」の異常や変異として自然に生まれた「半陰陽」「ふたなり」などから想像された産物であろう。ただし矢状断面の雌雄モザイクは昆虫では有るが哺乳類では表現型としては未だ無い。

「カーリー」「チャムンダー」などの鬼女ともいべき土着の女神には日本の「山姥」の面影をも見た。「自然そのもの」を神とも鬼とも懼れる思考形態は原初の祈りに共通しているように思う。中世のインドにあってイスラムが影響を持ち始めてかえってシャクティズムを通しヒンドゥー教が原初の地母神に揺り戻したかのようなのである。カーリーもチャムンダーも紛れもなく死の女神、恐ろしい形相である。日本の山姥も くめぐりめぐりて輪廻を離れぬ妄執の>解脱転生できない鬼である。

更に想像を拡げて行くと分野は異なるが語源的な相似をも感じる。日本語の「山ヤマ:yama」は「闇ヤミ:yami」とも通じるといわれる。そこは死者の集まり還ってゆくところでもあった。しかも思い出すのはかつて我々は「山に祈り山を拜む」民族であったということである。

筆者はインドを訪ね女神について思い巡らしながら日本語の「ヤマyama」の語源にインド、Sanskrit起源の「yamma」が関わっているのではないかと考えるようになった。紀元以後イ

インドから仏教の教典と共に中国の漢字に音訳されて入った言葉は勿論多い。「南無」「菩薩」「天」「阿修羅」「夜叉」「(地獄の)閻魔」などもSanskrit語源の漢字音訳であろう。しかし「山:yama」は<漢字>を仲介にしては辿れない。にもかかわらずインド大陸起源という思いを払えない。日本語は漢字によって多分始めて「文字」を得た。それより前は記録も証拠も無い有史以前となる。その数万年前の人の移動、言葉の移入でなければこの仮説は成立しない。しかし一方科学的に「日本人の起源」を解明しようという最近の人類学分野の流行がある。日本人の「成人型 T 細胞白血病」ウイルス・キャリア (ATLウイルス・キャリア) 『注』(6)は調査によると約100万人いる。キャリアは北海道、琉球、九州に多いとされている。更にこのATLウイルス・キャリアの人はインドや日本に存在しているが中国大陆にも東南アジアにもいないといわれる。(図28) 日本へ漢字が伝わるよりも遥か古い時代、人類の移動があった、インドから人も言葉も流れ、日本列島、殊に縄文人の中に残ったという推測は可能である。「山」と「ヤンマ」を関連づけるのは余りの飛躍かとも考えたが、偶然の音の類似にしてはそれ以上に概念の類似性、相似性を感じている。

又本論のテーマ「乳房」に関して近代西洋美術ではもっと明確に時代のメッセージを表現している場合がある。例えばフランスのルーブル美術館にドラクロアの絵『民衆を導く自由の女神』(図29)に見られる。教科書などにも見られる有名な絵で三色旗を掲げ累々たる屍を乗り越えて

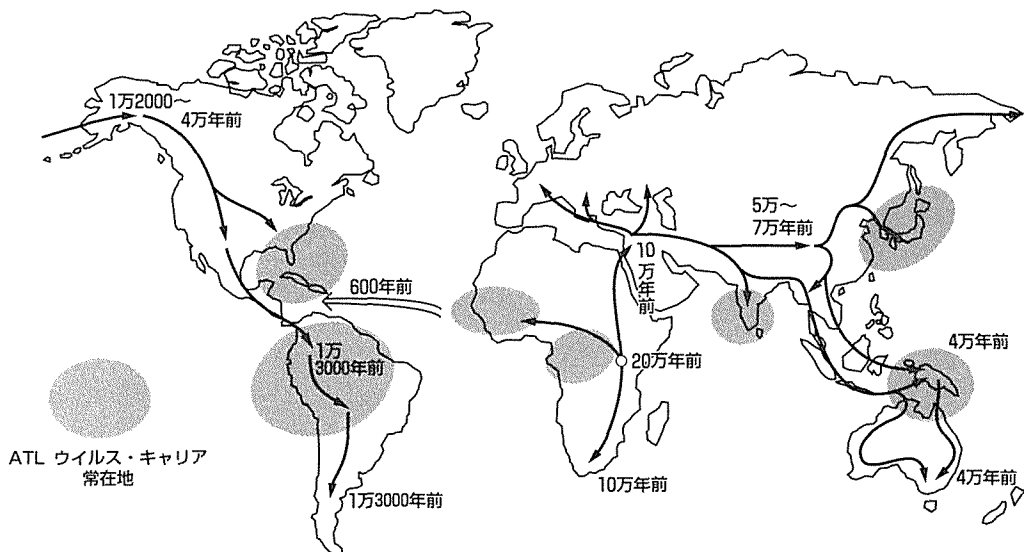


図28 人成人型T細胞白血病ウイルスのキャリア分布
(日沼氏による)

ゆく自由の女神である。教科書などでもお馴染みの絵で今は見慣れて構図に不思議を感じない。遙か昔、始めて写真でこの絵を見た時何故「女神」一人両胸を露わに出しているのであろうか？という疑問を持った。民衆は子供まで皆服を着ているではないか。

パリやニューヨークに立つ「自由の女神」は古代ギリシア風のキトン（Chiton）とヒマティオンですっぽりと肩から全身を包み「自由の灯」を掲げている。ずっと子供の頃からドラクロアの女神の胸は寒々と目にしみて気になる泰西名画であった。しかしこれはいみじくもフランス革命当時の社会思潮、時代の強いメッセージをも表しているという。『注』(7) フランス革命を経ても当時の提唱された警鐘は方向を変えることはなかった。近代フランスに限らない。本来母親の授乳の可否は新生児の生存に関わる重大事であり乳の出ない母親にとっては羊や牛の乳はまさに命の泉にとって代わった。18世紀フランス以後現代迄母親が授乳しない傾向はつとに指摘される。しかしこれは大変に難しい問題を含む。女性の中でも男性同様の野心・欲望・能力を持つ人、あるいは実際の独立を余儀なく要求される人、過酷な労働に携わる人もいるだろう。人間が他の動物と決定的に異なることの一つに「極めて未熟な状態で生まれる」ということがある。このため人間の子供に限って授乳期間のみならず何年も育児されなければ一個の動物として完成されないことである。人間の精神・能力の無限の可能性を開花させることと「動物学的未成熟性」とは人類殊に女にとって両立しがたい永遠の桎梏であり続けるかもしれない。現代も母乳育児の比率は低くアメリカなど1%にも満たないという。

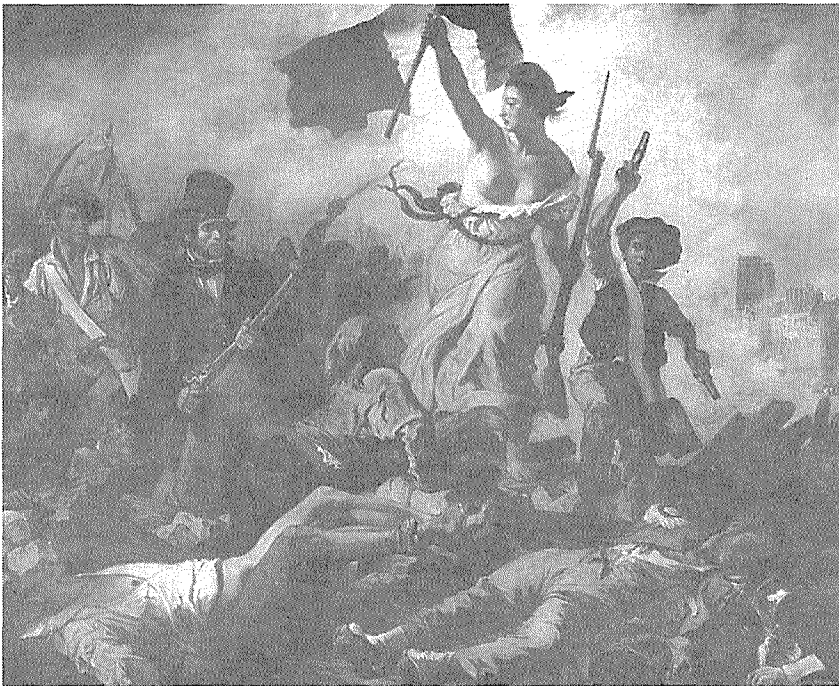


図29 民衆を導く自由の女神（1830年）

18世紀のフランスでは啓蒙思想家や一部の医者達による「自然への回帰」「母乳哺育のすすめ」が社会運動としてあった。（ドラクロア作 ルーブル美術館）

西洋的先端科学は世界の全ては人間のためにあるとする。英国ウィルムット博士によって体細胞乳腺からクローン羊「ドリー」が作製（1996.7.5.）された。哺乳類「無性生殖」の始まりであり、「生命の作製」である。これはもう善し悪しは別にして人類が引き返すことのできない臨界点に立ったといつて過言でないように思う。雌羊の乳腺細胞から作られたクローン羊は巨乳のセクシーな歌手ドリー・パートンに因んで「ドリー」と名付けられた。追試によって日本でクローン牛、ハワイでクローンマウスも作られた。目下の用途は良質の食肉を得、牛乳を大量にだすスーパーカウのクローン牛からミルクを量産すること、あるいは医療応用がうたわれている。結局のところ人間の科学や経済は「豊穡の乳」「よりよい食料」を求めて歳月を経てきたと言えないでもない。しかしふと立ち止まって考えると牛から文字通り乳を搾取し、良質の食肉を得るためにクローン牛を造るということ、人間の子供の大半を人の乳で育てなくなった時、なお人類は「哺乳類（Mammalia）」といえるのであろうか？と懼れる。

3. 結論

- ①古代インドの女神像は上半身裸である。おそらく身分の高い女性を表現するときは概ねそうであった。これは他の古代社会にも共通する表現である。インドでも7世紀頃の彫刻では裸に見えていても衣服の痕跡を思わせる「襟」「袖口」の表現を付け加えていることも多い。又同じ頃からブラジャーのような「胸当て」も彫像上出現する。
- ②紀元前後から約1000年に及ぶインド女神像には多種多彩な「乳房」の表現が見られる。健康な豊満さ、エロティックな奇態、性の奇形かと思われる男女両性具有神像、そして鬼女の萎びた乳房などおよそ人間に発生しうる乳房形態の「総カタログ」ともいえる。
- ③インドの「カーリー（Kālī）」や「チャムンダー（Cāmūṇḍā）」といった地母神の概念は日本の「山姥（Yamanba）」と共通部分を感じる。「yamma」という言葉は日本語の「ヤマ（yama）」の語源とも関連があるのではないかと推測する。

<終わりに>

女であれ男であれ「乳房を語る」ことは普通羞恥心を誘うものである。古代の石工の男たちが精魂込めて彫りあげた女神像を見て、「女である筆者が乳房を語る」のもいささか奇妙と思われるかもしれないが「女にしか見えない」視点もあるのではと考えてまとめた。彫刻の年代については研究者によって幅がかなり広いので所蔵する美術館の記載に従った。

「乳房」に対する観点やイメージは文化面のみならず広い問題を内包する。医学の最前線、乳癌の手術方式においても患者と医師の間に了解不能なgrey zoneが横たわってしばしばインフォームド・コンセントに齟齬を生じている。女性にとっての「乳房」は格別のものである。乳癌患者が手術宣告された時、その女性の顔には他の「臓器癌」の場合とは異なった反応、当惑・失意の感情の波紋が拡がるのを医者としても患者としても経験してきた。女性の身体の中でもとくに

「女」を表す器官「乳房」の持つ本来の機能、社会的意味や文化史を含め郷愁をも込めて「乳房・人間の未来」をも探っていきたいと考えた。

最後に筆者の初歩的疑問にも関わらず丁寧に答えいただいた定金計次先生、肥塚隆先生、立川武蔵先生、大野晋先生に感謝します。

< 注 釈 >

- (1) 乳海攪拌：インドの創世神話によると世界は「乳海攪拌」に始まったとされる。

「一神々は不死靈液アムリタ（甘露）を手に入れるにはどうすればよいか協議し、ヴィシュヌ神に相談したところ、マンダラ山を攪拌棒として大海をかき混ぜよと教えられた。そこで神々はアスラ（阿修羅：悪魔）と協力することにして、マンダラ山を引き抜き、それにヴァースキー竜を巻き付け両側から引っ張って回転させた。ところが、海の底に穴があき山が沈みそうになったため、ヴィシュヌは亀に姿を変えて海に潜り、甲羅でマンダラ山を支えた。やがて海の水は乳状に変じ、その中からさまざまな宝が現れてきた。最初に出てきた願ったものをなんでも産む牝牛スラビーは聖仙たちに送られた。つづいて月のように輝く白馬ウッチャイヒシュラヴァ、四本の牙を持つ聖像アイラヴァータが姿を現した。次に出てきた宝石カウストゥヴァはヴィシュヌが自分の胸に飾った。さらに聖樹パーリジャータ、天女アプサラスのあとに美しいシュリー女神（ラクシュミー）が出現した。神々もアスラも彼女を欲しがったが、女神はヴィシュヌを夫に選んだ。落胆しているアスラたちに酒の女神ヴァールニーが与えられたのち、最後に神医ダヌヴァンタリがアムリタの入った壺を持って現れた。神々とアスラたちは争ってそれを飲もうとしたがアスラの方が先に壺を奪ってしまった。ヴィシュヌはモーヒニーという美しい女の姿に変じて取り返しに行った。アスラたちはその美しさにうたれ、アムリタの分配を彼女にまかせた。モーヒニーはアスラたちを幻惑し神々にだけアムリタを飲ませた。こうして神々は不死となったのである。」（文(12)p27-8）

- (2) 球形の原人（プルシャ）：「人間の性は三つであって、現在のように男性と女性の二つだけではなく、これら両方の性に共通な第三の性もほかに加えられていた。この性については、現在名称だけが残っているが、そのもの自体は消滅してもうない。男女両性という一つが、形の上でも名称の上でも、男性と女性の両者からなる共通なものとして、当時はあったのであるが―――次に個々の人間の形であるが、それは全体として球形をなし、背骨と肋骨をぐるりと周りに備え、手を四本、また足も手と同じ数だけ持ち、顔も二つ、どこを見てもまったく同じなのが円形をなしている首の上についていた。また頭は、互いに反対向きにされている両方の顔の上に一つつき、耳は四つ、また陰部は二つ、そしてその他すべての部分も、以上の諸部分から推量できるような状態にあった。」（文15 p124）

- (3) ヤクシー：ヤクシーはアーリア人以前からの信仰に由来する。先史時代より太古の河水から出てきた宇宙観に地母神としてあらわされる。五穀豊穡を司る神でもあった。アショカの樹下に立っている像も多く、この木は美しい乙女に触れられることよってのみ花を咲かせるというアショカ・ドーハドの言い伝えもある。中央アジアや我が国の樹下美人もヤクシーの流れを汲むといわれる。

「ヤクシー像はシャーラパーンジカー、ヴリシュチカー、スーラスンダリーなど無数の名で呼ばれているが、これらの美しい乙女達は繁殖力の象徴であり、生殖力の成就と豊穡の使者である。」（文（23））

- (4) アサ（ハシシhashish）：バーング(bhagアサ、大麻)はシヴァ神が発見し好むといわれる。神話、教典にはヴァイジャ（vijaya 勝利）の名で登場し「乳海攪拌」の時、海から出現したとされる。乾燥葉をパー

ング、雌花序をガンジャ (ganja)、葉や花序に集積する樹脂状の抽出物をチャラス (caras) といいそれぞれに薬理作用、向精神作用がある。麻薬に近く麻酔薬、鎮痛薬などの作用があり栽培・売買は禁じられている。しかし修業中の行者やシヴァ神の信奉者が少量用いて「宗教的法悦」の錯覚に陥ることがあるようである。(文(16)p188-9)

- (5) Kālī (カーリー), Cāmūṇḍā (チャムンダー) : ガンジス河に沐浴にやってきたパールヴァティー女神からシヴァー女神——アムピカーとも呼ばれる——が生まれた。又この女神はカウシキーとも呼ばれている。(パールヴァティー女神の身体=コーシャから生じたという意味)

「アムピカー女神がパールヴァティー女神の身体からお生まれになったとき、パールヴァティー女神の顔色は黒くなってしまわれました。そのためパールヴァティー女神にはカーリカ (黒い女) という名がついたのです。さて戦いの最中にシュムバとニシュムバがアムピカー女神に急に襲いかかると、彼女の顔は怒りのため黒くなり、そこから恐ろしい顔をしたカーリー女神——彼女は頭蓋骨の首飾りと虎の皮を身につけ、悪魔のような武器を手持っていた——が出現されました。そして彼女はチャンダとムンダという悪魔を殺してアムピカー女神のなかに戻られました。そこでアムピカー女神はカーリー女神がこれらの悪魔を殺したので、彼女にチャムンダーという名 (チャンダとムンダを殺した女という意味) を与えられたのでした。」(文(19) P414)

- (6) 成人型T細胞白血病：ウイルスで起こる白血病の一種。このウイルスのキャリアは国内に約100万人いるといわれる。そのうち5%以下しか発症しない。HTLV-1と呼ばれているウイルスで、男性から精液を通して女性、母となった女性の母乳から子供へと主に家族内感染する。
- (7) 母乳運動：フランス革命当時の啓蒙主義者、医者、モラリスト達、例えばジャン・ジャック・ルソーを中心に「自然への回帰」を提唱する運動があった。この中には子供を母乳で育てるべきだとする主張も含まれる。当時の絵には他にも女性の両胸を露出したものがあり母乳哺育を象徴的に勧めている。当時の社会状況は次の様であった。「1780年。パリ警察庁長官ルノアールはしぶしぶ次のような事実を認めている。毎年、パリに生まれる二万一千人の子どものうち、母親の手で育てられるものはただか千人にすぎない。他の千人は——特権階級であるが——住み込みの乳母に育てられる。その他の子供はすべて母親の乳房を離れ、多かれ少なかれ遠くはなれた、雇われ乳母のもとに里子に出されるのである。」(文(13) P25) 当時母親に母乳で育てられることがむしろ珍しいことであったとわかる。

<参 考 文 献>

- (1) Albert S.lyons,MD et al著 小川鼎三監訳『図説医学の歴史』1980 学習研究社
- (2) A.L.BASHAM 1967 『THE WANDAER THAT WAS INDIA』 Rupa&Co.
- (3) Anne Hollander著 中野香織訳 1997 『性とスーツ』 白水社
- (4) 小川安朗 『民族服飾の生態』 1984 東書選書 東京書籍
- (5) 定方 晟 1992 『インド性愛文化論』 春秋社
- (6) Gina Kolata 著 中俣真知子訳 1998 『クローン羊ドリー』 株式会社アスキー
- (7) セシル・サンローラン著 深井晃子訳 1989 『女性下着の歴史』 Editorial Wacoal
- (8) 立川武蔵 1990 『女神たちのインド』 せりか 書房
- (9) 辻 直四郎訳 1996 (29刷) 『リグ・ヴェーダ讃歌』 岩波文庫 岩波書店
- (10) Thomas Donaldson, "Propitious-Apotropaic Eroticism in the Art of Orissa",
Vol.37,1/2, 1975 Artibus Asiae.
- (11) ドラクローア The Great Artists 1991 同朋社出版
- (12) 長谷川 明 1997 『インド神話入門』 新潮社

- (13) E.バタンテール著 鈴木晶訳 1998 『母性という神話』 筑摩書房
- (14) ヴァーツヤーヤナ著 大場正史訳 1997 (19版) 『カーマ・スートラ』 角川書店
- (15) プラトン著 戸塚七郎訳 1970 『ソクラテスの弁明・饗宴』 旺文社文庫
- (16) T.C.マジュプリア著 西岡直樹訳 1989 『ネパール・インドの聖なる植物』 八坂書房
- (17) 宮本昭 『インド美術史』 1997 (第5刷) 吉川弘文館
- (18) 宮本啓一 1989 『インド文明5000年の謎』 光文社
- (19) 山崎利男 1994 『悠久のインド＜ビジュアル版＞4世界の歴史』 講談社
- (20) ラーマ・クリシュナ・G・パンダルカル 著 島岩、池田健太郎訳 1993(2刷)
『ヒンドゥー教』 せりか書房
- (21) Indian Art Prince of Wales Museum of Western India 1987 (Bombay)
- (22) Karl Khandalavala 1991 『The Golden Age Gupta Art—Empire, Province and Influence』
Edited by Karl Khandalavala Mary Publication
- (23) 『インド古代彫刻展』 1984.3.22.～7.8. 京都国立博物館
- (24) 『アンコールワットとクメール美術の1000年展』 1998.1.15.～3.22. 大阪市立美術館
- (25) ジョン・ジャーキー著 鶴岡真弓訳 1998(2刷) 『ミステリアス・ケルト』 平凡社

(1998.9.17 受理)